

【 玖珠町 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

1 調査結果の分析

小学校：国語

- 平均正答率は63%。県平均69%、全国平均67.7%を下回っている。
- 低学力層（正答率20%以下）の児童の割合が2.3%（県1.5%、全国2.1%）とやや多い。
- 正答率50%以下（7問以下）の割合は、33.0%（県22.1%、全国：24.6%）であり、県及び全国に対して10%程度多くなっている。また、玖珠町の目標（10%未満）は、達成できていない。
- 正答率80%（11問）以上の上位層の割合は31.8%である。12問の児童数が多いものの10%以上の差がついている（県46.0%、全国43.4%）。また、全問正解者は3名であり、その割合も低い。
- 中央値が県・全国が10問であることに対して、本町は9問と低い結果になっている。
- 領域及び観点のすべてで、県平均と全国平均は同レベルであることに対して、玖珠町はすべてにおいて下回っている。特に、「我が国の言語文化に関する事項」と「話すこと・聞くこと」については大きな差がついている。
- 14問中3問のみが県平均・全国平均を上回っている。
- 県平均・全国平均と5pt以上の差がある問題は1問のみである。

2 具体的な改善方策

小学校：国語

1. 低学力層へのきめ細かい支援

- ・低学力層の生徒に対して、個別指導や少人数指導を積極的に実施し、一人ひとりの課題に合わせた支援を行う。
- ・基礎的な知識や技能の定着を図るためのプログラムを導入し、反復学習やドリル学習を徹底する。
- ・家庭学習の習慣づけを支援し、学習計画の作成や時間管理の方法を指導する。

2. 「我が国の言語文化に関する事項」と「話すこと・聞くこと」の強化

- ・読解力の向上：多様な文章を読み解く活動を通して、読解力を向上させる。
- ・表現力の育成：話すことや書くことを通して、自分の考えを的確に表現する力を育成する。
- ・言語文化に関する学習の充実：日本の伝統文化や歴史に関する学習を深め、言語文化への理解を深める。

3. ICTの効果的活用

- ・デジタル教材の効果的かつ積極的な活用を図る。（補充学習やchromebookの持ち帰り学習）

4. 図書館の効果的活用

- ・図書館活用授業を継続的に実施し、様々な文章に触れることで、語彙力や読解力を高める。

【 玖珠町 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：算数）

1 調査結果の分析

小学校：算数

- 平均正答率は、62%であり、県平均63%及び全国平均63.4%と同程度である。
- 低学力層（正答率20%以下）の児童の割合が12.5%（県10.2%、全国10.4%）とやや多い。
- 正答率50%以下（8問以下）の割合は、34.0%であり、県平均（32.4%）や全国平均（32.5%）と同レベルである。しかし、玖珠町の目標は、達成できていない。
- 正答率80%（13問）以上の上位層の割合は33.0%（県32.3%、全国33.7%）であり、同程度の結果となっている。
- 領域「変化と関係」が43.9%（県48.3%、全国51.7%）と低い結果になっているが、他の結果は県・全国平均を上回るか、同程度の結果となっている。
- 設問別正答率は、16問中4問が県平均及び全国平均を上回る結果となっている。内2問は正答率を5pt以上上回っている。特に円グラフは90%以上の正答率となっている。
- 速さの違いを問う問題は、県・全国平均を5pt以上下回る結果となっている。他の問題は同程度である。
（問題例）「家から学校までの道のりが等しく、かかった時間が異なる二人の速さについて、どちらが速いかを判断し、そのわけを書く」

2 具体的な改善方策

小学校：算数

1. 低学力層へのきめ細かい支援

- ・低学力層の児童に対して、個別指導や少人数指導を積極的に実施し、一人ひとりの課題に合わせた支援を行う。
- ・基礎的な知識や技能の定着を図るためのプログラムを導入し、反復学習やドリル学習を徹底する。
- ・家庭学習の習慣づけを支援し、学習計画の作成や時間管理の方法を指導する。

2. 基礎・基本の学力の定着

- ・町独自で実施している算数確認テスト（年4回）に向けた継続的な取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
- ・町確認テスト問題データベース（町内共有）の活用で定着を図る。

3. ICTの効果的活用

- ・デジタル教材の効果的かつ積極的な活用を図る。（補充学習やchromebookの持ち帰り学習）
- ・chromebook及びその他のICT機器の積極的な活用を活かして、各学校の取組を共有化していく。

【 玖珠町 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：国語）

1 調査結果の分析

中学校：国語

- 平均正答率は、56%であり、県58%、全国58.1%を2ポイント下回っている。
- ほとんどの領域と観点で県平均及び全国平均と同程度である。
- 領域「読むこと」は、県・全国平均をやや下回っている。
- 低学力層の生徒の割合（正答率20%以下）は、無得点者1人を含む9.8%（県8.0%、全国7.6%）とやや多い。
- 正答率50%以下の生徒の割合は、52.5%（県46.5%、全国45.3%）であり、過半数の生徒が50%以下の正答率となっている。本町の目標を達成できていない。
- 正答率80%以上（12問以上）の上位層は、20.3%であり、県平均22.7%・全国平均23.3%に比べ少ない結果になっている。全問正解者は3人でその割合は、県・全国平均より多くなっている。
- 県・全国の中央値が9.0であるのに対して玖珠町は8.0と低くなっている。
- 設問別正答率は、15問中県・全国平均を上回ったのは2問、5pt程度下回る問題が4問、残り9問は同程度である。

2 具体的な改善方策

中学校：国語

1. 低学力層へのきめ細かい支援

- ・低学力層の生徒に対して、個別指導や少人数指導を積極的に実施し、一人ひとりの課題に合わせた支援を行う。
- ・基礎的な知識や技能の定着を図るためのプログラムを導入し、反復学習やドリル学習を徹底する。
- ・家庭学習の習慣づけを支援し、学習計画の作成や時間管理の方法を指導する。

2. 基礎・基本の定着

- ・授業におけるねらいの設定において、ICTの活用を含めて「考えるための技法」を意識して設定をする。
- ・「読む・書く」基礎技能（正確に読む・速く正確に書く等）の習熟を図る取組を引き続き継続する。
- ・読解力の充実に向けて、学校司書と連携し組織的に読書習慣の定着を図る。（朝読書の継続）
- ・教科部会を定期的に開催し、日常的に指導方法の交流・工夫改善を図る。

3. 漢字や語句の定着

- ・国語科の授業における系統的な指導を充実させる。
- ・国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
- ・漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、伸ばす言語環境づくりに力を注ぐ。

【 玖珠町 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：数学）

1 調査結果の分析

中学校：数学

- すべての領域と観点で県平均及び全国平均を下回っている。領域「データの活用」で全国と5ptの差があるが、他の区分では県・全国と同程度あるといえる。
- 低学力層の生徒の割合（正答率20%以下）は、無得点者3%を含む28.2%（県22.6%，全国20.3%）と多い。
- 正答率50%以下の生徒の割合は、53.4%（県54.8%，全国51.2%）で半数を超えている。
- 正答率80%以上（13問以上）の上位層は、20.5%（県17.8%，全国20.4%）である。
- 県・全国の中央値が9.0であるのに対して本町は8.0と低くなっている。
- 設問別正答率は、15問すべての問題で全国平均を下回っている。
- 県・全国平均を上回る問題もあるが、下回る問題が多い。5pt程度の差がある問題が7問題ある。また、全国平均に対して極端に正答率の低い問題もある。
 - ・確率 玖珠町61.2%（県64.8%，全国73.1%）
 - ・三角形の合同の証明 玖珠町12.6%（県19.0%，全国25.8%）

2 具体的な改善方策

中学校：数学

1 低学力層へのきめ細かい支援

- ・授業形態の工夫等を通して、個別指導の充実を図る。
- ・町確認テスト問題データベース（町内共有）の活用で定着を図る。
- ・教科部会を定期的に開催し、日常的に指導方法の交流を実施する。
- ・小学校からの円滑な接続を図るため、校種間連携協議会を開催し小学校との連携を強化する。
- ・学校運営協議会が主催する「未来塾」と連携し、低位層へのフォローを丁寧に行っていく。

2 基礎・基本の学力の定着

- ・指導事項を明確にした授業づくりを徹底する。
- ・町独自で実施している数学確認テスト（年4回）に向けた継続的な取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
- ・問題データベースを積極的に活用する。
- ・AIドリルを活用して基礎的事項の定着を図る。（持ち帰り学習課題）

【 玖珠町 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問調査）

1 調査結果の概要

児童質問調査

【基本的生活習慣・自尊感情に関すること】

- 学校の授業以外の勉強時間について、「30分未満」「全くしない」という回答の割合は、玖珠町では、9.3%と、全国(18%)よりも低い値になっている。
- ゲームをする時間が平日1日あたり「3時間以上」「4時間以上」の割合は、31%（全国30%）である。また、「ゲームをしない」層が1割程度いる。この層と「4時間以上」ゲームをする層（小学校15%）の正答率を比較すると小学校では国語20pt、算数で17ptの差が見られる。
- 「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対しての肯定的回答は、86%（昨年度70%）であり、全国平均よりも高い数値である。

【授業等に関すること】

- 「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の問いに対しての肯定的回答の割合は、92%であり主体的な学びができているといえる。
- 「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」の問いに対しての肯定的回答は68%で、3割以上の生徒が否定的な回答を示しており、「対話的な学習」には課題があるといえる。
- 学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、「どの程度使用したか」の問いに対して、「ほぼ毎日」「週3日以上」と回答した児童の割合は86%であり、全国平均60%を大きく上回っている。

生徒質問調査

【基本的生活習慣・自尊感情に関すること】

- 学校の授業以外の勉強時間について、「30分未満」「全くしない」という回答の割合は、本町では、10%と、全国(17%)よりも低い値になっている。
- ゲームをする時間が平日1日あたり「3時間以上」「4時間以上」の割合は、37%（全国29%）であり、全国平均よりも割合が高くなっている。また、「ゲームをしない」層が1割程度いるが、この層と「4時間以上」ゲームをする層（中学校24%）の正答率を比較すると小学校では国語17pt、数学で34ptの差が見られる。
- 「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」という質問に対しての肯定的回答は、89%（昨年度81%）であり、全国平均よりも高い数値である。

【授業等に関すること】

- 「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の問いに対しての肯定的回答の割合は、91%であり主体的な学びができているといえる。正答率は、「当てはまる」と回答とした方が「どちらか」として「当てはまる」と回答した方よりも高く、国語で8pt、数学で11ptの差があった。
- 「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか」の問いに対しての肯定的回答の割合は65%で、3割以上の生徒が否定的な回答を示しており、「対話的な学習」には課題があるといえる。
- 学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を活用することについて、「どの程度使用したか」の問いに対して、「ほぼ毎日」「週3日以上」と回答した児童の割合は98%であり、全国平均64%を大きく上回っている。

2 玖珠町の児童・生徒質問調査の調査結果をふまえて

小・中学校において、授業に対して前向きに取り組もうとする姿勢の回答が多く、教職員の授業改善の取組が児童生徒に実感として伝わっているが、「自己肯定感が低い」「学力が低い」児童生徒がいることも事実である。したがって、より一層「誰一人取り残さない取組」が求められる。

今後の主な課題は、

1 自己肯定感（自己存在感）の向上

授業や特別活動をはじめとして、学校の教育活動全体の中で、生徒指導の3機能を生かした取組の充実を図り、家庭や地域との連携を図ることで、児童生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。

2 家庭学習の充実に向けた学校挙げての取組の強化

「児童生徒一人ひとりの家庭での時間の使い方を丁寧に把握し、家庭と連携しながら個別の指導を行うとともに、学校全体で家庭学習の習慣化や充実を図る取り組みを進めていく。具体的には、家庭学習の方法を指導したり、家庭学習の記録やチェックの方法を工夫したり、計画的な課題を提示したりするなどの取組である。内容をより充実させることによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。

3 表現力の向上の取組

学校における教育活動全体を通して、児童生徒個々の表現力を向上させる取組（例：表現する中身をもたせ、説明する場を設定した授業改善、行事等における表現の場の設定と丁寧な事前・事後指導等）を充実させることや、互いの考えを聴き合い、認め合う学校・学級の風土を創り上げていくことによって、表現力の更なる向上を目指す必要がある。

4 学校間の連携の強化（校種間連携協議会の深化・充実）

小中および小学校間の校種間連携を深め、9年間を通して共通して指導する内容の焦点化や有効な指導方法の共有等を行うことによって、教職員の更なる指導力の向上を図っていく。

【 玖珠町 】

令和6年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問）

1 調査結果の概要

小・中学校：学校質問

本町においては、小学校（6校）と中学校（1校）義務教育学校（1校）合わせて調査対象学校数が8校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして昨年度同様、以下の点があげられる。

- 全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。
- 全小中学校が、ICT機器を活用した授業を積極的に行っている。小学校の端末持ち帰りも進み、中学校においては毎日持ち帰らせて家庭での利用が日常の光景となっている。
- 学校運営の状況や課題についても、全教職員間で共通理解をし、組織的な取組ができている。
- 全学校が、全国学力・学習状況調査の分析結果を学校全体で教育活動を改善するために活用している。

2 玖珠町の学校質問調査の結果をふまえて

ほとんどの町内小・中学校が各質問に対して肯定的な回答をしていることなどから、各学校において組織的に取り組んでいることが見てとれる。

今後の主な課題

1 子ども一人一人を主語とする、主体的・対話的で深い学びを意識した授業改善

組織的な授業改善による授業の質の向上を目指し、児童・生徒自らが調べ、整理し、発表・交流する問題解決的な展開の授業を積極的に行う必要がある。また、GIGAスクール構想第2期での、ICT機器の効果的な活用を全町的に展開させていく必要がある。

2 家庭学習の充実に向けた学校挙げての取組の強化

学校を挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。デジタル教材の利活用やクラウド環境下でのChromebookの持ち帰りによる家庭学習の充実を図る。

3 学校間の連携の強化（校種間連携協議会の深化・充実）

小中および小学校間の校種間連携を深め、9年間を通して共通して指導する内容の焦点化や有効な指導方法の共有等を行うことによって、教職員の更なる指導力の向上を目指し、中1ギャップの解消を図っていくようにする。さらに、小1ギャップの解消に向け、架け橋期の連携充実も同時並行に取り組んでいく。